

教科指導の実質的展開にかかる一考察（中高英語）——ベースとしての paragraph 論を中心に

A View of the Substantial Development of Teaching Method (Junior & Senior High English): Focusing on a Paragraph as the Basis of Persuasiveness

後口伊志樹 (Ishiki Ushiroguchi)

1 はじめに

周知のように、2011 年度から小学校 5・6 年生を対象に「外国語（英語）活動」が導入された。その目標は、「外国語（英語）を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語（英語）の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」である。また、改訂学習指導要領における中学校外国語（英語）教育の目標は、「外国語（英語）を通じて言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的なコミュニケーション能力の基礎を養う。」であり、さらに高等学校では、「外国語（英語）を通じて、言語や文化に対する態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的なコミュニケーション能力を養う。」がその目標¹となっている。キーワードが「コミュニケーション能力」であることは明らかであり、「コミュニケーション能力の素地を養う」（小学校）、「実践的なコミュニケーション能力の基礎を養う」（中学校）、「実践的なコミュニケーション能力を養う」（高等学校）という形で、8 年間に亘って展開される学校における外国語（英語）教育を段階的・構造的に捉え構想することの重要性と必要性が示されていると言える。

では、コミュニケーション能力²とは何か。ここでは、verbal³ な領域に限定して図表

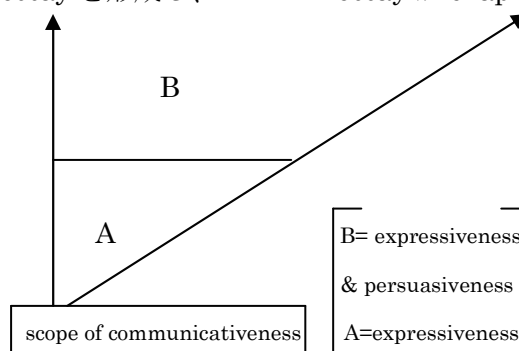
1 のように区分してみる。①は言語を習得するプロセスの初期的段階に伴うコミュニケーションレベルであり、要素的な知識・技能の習得と拡充が学習者の関心の中心をなす段階である。②は要素的な知識の関係性の認識やその組み合わせが切り開く新たな意味領域に一步踏み出すコミュニケーションレベルであるが、この段階でも①同様、表現力ひとつとっても甚だ限定的で、意味伝達上の制約が避けられない。③に至って初めて、コミュニケーションレベルは闊達さを獲得する。その意味で sentence が豊かな意味伝

verbal communication	level
① one-word	1
② one-phrase	2
③ one-sentence	3
④ one-paragraph	4
⑤ one-essay	5
⑥ one-chapter	6
⑦ one-book	7

図表 1

達手段の基本的なかたまりであることは確かであって、このことは、学校教育（中高）における英語指導の中で強調される表現単位が、しばしば sentence に集中し（あるいは止まり）がちであることと無縁ではない。だが、コミュニケーション能力は、expressiveness⁴ とともに persuasiveness⁵ を不可欠の要素として含んでいる点を忘れてはならない。両者の関係が図表 2 に示す様相を呈するとすれば、この persuasivenessこそコミュニケー

ション能力育成の最終（第一義的）眼目でなければならない。そして、**persuasiveness** を担う表現ユニットが **paragraph** である点に立脚して、学校における英語指導の中心課題は④を核とするものでなければならないと思われる。なお、⑤から⑦については、**paragraph** を基本単位として発展的に展開される形態であって、一般的には5～8のセット構造が想定される。すなわち、5～8の **sentence** のまとまりが **paragraph** であることを前提に、5～8の **paragraph** のまとまりが **essay** を形成し、5～8の **essay** が **chapter** を、5～8の **chapter** が **book** を形成するのである。比喩的に言えば、**persuasiveness** という意味伝達機能を司るユニットとしての **paragraph** が積み木細工のごとく組み合わされて、ある時は **essay** の、ある時は **chapter** 等の形態を、一定の狙いのもとにとるのであるとも言える。この観点から本稿では英語指導の実質的展開の問題について **paragraph** 論を切り口に考察を試みてみる。

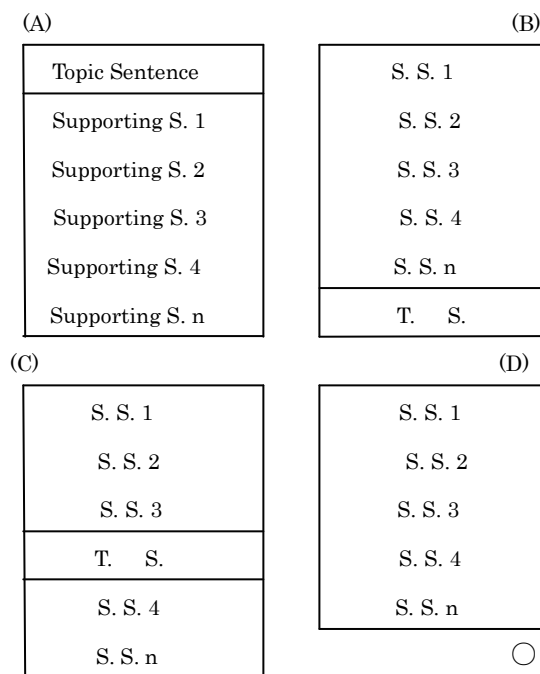


図表 2

2 persuasiveness の要件

(1) paragraph の基本構造

paragraph が **persuasiveness** を有する要件については、その構造に着目することで明らかになる。図表 3 は **paragraph** の基本構造が四つに大別され、それが一つの **Topic Sentence**（話題文）と複数の **sentence** で構成される **Supporting Details**（具体論）で成り立っていることを示す。一般的形式として多用されるのは、図中の(A)と(B)であるが、それらを融合させて、 $\langle A \cdot B \rangle$ 又は $\langle B \cdot A \rangle$ という形態をとることも頻発する。前者は先行する **Topic Sentence** と後置されるそれに、話題の提供と **assertion**（主張）の役割をそれぞれに分担することによって「序論→本論→結論」に近い論述形態を成すような場合を指す。また、後者は A と B の **Topic Sentence** を統合し **Supporting Details** を前後に挟んで構成観を整えれば、(C)の形に収斂されるが、その過程で **persuasiveness** に相応の豊かさが伴う。(D)は全体が **Supporting Details** だけで構成される場合を示す。主題の認知を言外（図表の中では「○」で示す）に促す論述形態で



(Supporting Sentence 1~n = Supporting Details)

図表 3

ある。

paragraph 構成論の観点で言えば、英語の論述形態はこれら四つの基本形か又はその組み合わせに拠っていると考えて大過ない。そして、四つの基本構造に洩れなく共通する要件が **Supporting Details** である。つまり、一つの paragraph の大半（あるいは全部）がそれであることに想到すれば、この **Supporting Details** の良否が paragraph の良否を決めるリトマス試験紙であることは明らかであり、**persuasiveness** の水準は正にそれによって決まると言っても過言ではない。

(2) Supporting Details の一般的構造

では、paragraph が **persuasiveness** をどの水準まで有するかを決する **Supporting Details** の一般的構造とは何であろうか。

図表 4⁶に示すタイプ 1 は、**Supporting Details** が「分類・区分」で構成される場合を言う。漠然としたカテゴリーを、茫漠たるまま論じたのでは主題が明確化しない。所与の基準等を充てがうなどして分類・区分すれば、paragraph の枠内処理が可能になり、主題の具体論として有効に機能する。タイプ 2 は「比較・対比」で構成される。類似点に依拠して論じる ケース（比較）と相違点に依拠して論じる ケース（対比）が考えられる。客観的なデータを示して類似点や相違点を明確にし、主題の論拠を相対的に明らかにしてゆく場合に有効である。タイプ

Type	Structure
1	Classification
2	Comparison & Contrast
3	Definition
4	Illustrations & Examples
5	Cause & Effect
6	Personal Opinion & Reason
7	Problem Solution
8	Process
9	Enumeration
10	Others

図表 4

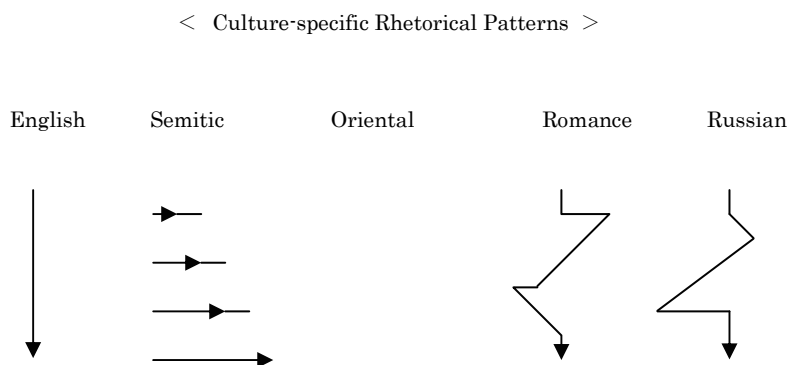
3 は **Supporting Details** が「定義」で構成される。主題のキーワードに解釈枠の広範な概念を採択した場合、その概念をどのような意味で用いるのかについて定義しておく必要があり、その定義の過程はそのままで主題の明確化にも繋がる点で有効である。タイプ 4 は具体的な例示に主題の説明を担わせる手法である。例示の選択が的確であれば、もっとも **persuasiveness** の機能が高まる形態であり、重用される。タイプ 5 は「原因・結果」で構成され、①「原因→結果」、②「結果→原因」、③「原因⇔結果」という三つの展開パターンが一般的である。常日頃から「なぜ」という疑問を抱き、その疑問に論理的に答える思考パターンを重視する英語文化圏にあっては好ましいと受け止められる（従って多用される）paragraph 構造と言える。タイプ 6 は「意見・理由」から成る。自分の意見を主張するとき、そう考える根拠や理由を明らかにすることによって **persuasiveness** が向上するがゆえに、この形態もまた英語文化圏では好んで用いられる paragraph 構造である。なお、「自分の主張」は通常 **Topic Sentence** に盛り込まれるのであり、**Supporting Details** には馴染まないのではないのかという指摘には、図表 3(A)(B)の融合形である <A・B>型の場合などを想起することで対応できよう。どちらかの **Topic Sentence** を **Supporting**

Detailsの一部として組み込むことによって、逆に全体の Topic Sentence が一層鮮明に浮かび上がるという効果を生み出す場合を想定してみるのである。タイプ7は「問題の解決法」で構成される場合である。問題の出来が前提で展開される paragraph は問題の明確化とその解決法についての言及が欠かせない。 Supporting Details は前者を中心とし、解決法は Topic Sentence として示されるのが一般的だが、問題の明確化は解決法に至る過程呈示でもあるので、このケースが成立する。タイプ8は「プロセス」説明で構成される。仕事上の新企画であるとか、新たな実験・実施方法であるとか、始点から終点までの手順を的確に説明する際に用いられる論述形態である。従って、時系列的展開が基本となる。タイプ9の Supporting Details は「列挙」である。列挙は主題文の具体例という位置づけで限定的に用いられる。従って、この形態は図表3の(D)を想定している。 Topic Sentence を省略することができるレベルに単純化することによって逆に persuasiveness の向上を目論む狙いもある。タイプ10はタイプ1からタイプ9までを部分的に組み合わせた形態を「その他」として表したものである。例えば、タイプ5とタイプ7を融合させて、問題の明確化を原因⇔結果の視点で論じるなどの場合を指す。

(3) 英語の直線的思考構造

paragraph を表現ユニットとする英語の思考パターンは直線的である。 paragraph 内の全ての sentence は互いに関連し合って主題或いは主張を理路整然と根拠付けるものとして配置される。主題から逸脱したものは排除されるというメンタリティが常に働く言語と言えよう。図表5⁷は言語学者 Kaplan (米国) による各言語圏の思考パターンの比較表である。 Oriental に属する日本

語は「渦巻型」の思考パターンで、主題が何であるのか理解できないという印象を、欧米人に与えがちであると言われる。フランス語やスペイン語といったロマンス語であれ、ロシア語であれ、思考パ



図表5

ターンは原則として直線的であるが、それらが、主題を展開していく過程で脇道に敢えて逸れて、聞き手や読者の興味・関心を刺激したり（前者）、途中で、哲学的あるいは歴史観的な脱線をしばしばする（後者）のに対して、英語はあくまでも直線的で、原則的に逸脱を許さない。英語における persuasiveness の問題はこうした思考パターンとも縦横に絡んでいる。良い英語とは直線的な思考展開を基盤に paragraph という表現ユニットを装置として、 Topic Sentence に示される主題から逸脱しない形で設けられる Supporting Details が豊かに充実している様態を言うとするれば、その様態を本稿では persuasiveness

という概念を当てて表そうとしている。逆の言い方をすれば、**Supporting Details** が充実し、主題を的確に支える形で、**paragraph** が構成されるとき、直線的な思考パターンが最も有効に機能する。そのプロセスの中で証明されるのが他ならぬ **persuasiveness** であって、それが実は、**communicativeness** の verbal な意味での正体と考えてみる必要があるのではないかと思われる。

3 paragraph をベースとした四技能論

reading (読むこと)、**writing** (書くこと)、**speaking** (話すこと)、**listening** (聴くこと) という四技能の習熟を目途にどのように指導を図るかについても、**paragraph** 論の視点で整理しておきたい。

(1) reading

reading の形態を、コミュニケーション活動の視座に立って列挙してみたものが図表 6⁸

である。①は集中して注意深く読む(精読) ②は豊かな情報を求めて大量に読む(多読) ③は時間をかけずに素早く読む(速読) ④は時間をかけてゆっくり読む(遅読) ⑤は声を出して読む(音読) ⑥は声を出さずに読む(黙読) ⑦は要点を抑えながら読む(掬い読み) ⑧は特定の情報を得るために読む(探し読み) 形態をそれぞれ表す。①から⑧は元よりそれにふさわしい題材を対象として有する。例えば、①は学術論文等の高度に分析的で構造化された文献の場合にふさわしい読み

skill	activity category	activity forms
reading	communication	① intensive reading
		② extensive reading
		③ rapid reading
		④ slow reading
		⑤ oral reading
		⑥ silent reading
		⑦ skimming
		⑧ scanning
		⑨ paragraph reading

図表 6

方である。様々な分野に亘って知見を拡充し、特に話し書く技能の充実に向け、情報の蓄積化を図る場合にふさわしい読み方は②である。物語やノンフィクションのように展開を素早く掴む場合にふさわしい読み方は③であろうし、詩歌のように、凝縮された文字数と行間から深い意味論を紡ぎ出す場合にふさわしい読み方は④である。⑤と⑥については声に出すか否かという一点に依拠する区分の仕方であって、⑤に関しては、**oral interpretation**⁹ が大きな意味を持つ読み聴かせや範読などの、聴き手が介在する局面が想定される。**reading** の題材はそのジャンルによって、例えば喜怒哀楽の情であるとか、強弱緩急のリズムであるとか、音声に伴う身振り手振りといった **bodily language** の類が、書かれた事柄を鮮明に伝えたり、共感を引き出す上で極めて効果的な役割を果たす。その意味で、範読指導等における **oral interpretation** の重要性は明らかであり、その認識に立って **reading** 技能の習熟を促すとすれば、それは指導上の有力な工夫のひとつとなりえる。**Topic Sentence** は最も強く念を押すように、**Supporting Details** は比較的スピーディに、しかし中でも中心的な具体論については **Topic Sentence** に繋ぐ視点で **paragraph** 内第2強勢を置きながら範読する。その強勢やリズムの在り方が読解を支えている側面にも注目

してみる必要がある。このことは **sentence** における意味語と機能語が作り出すリズムを **paragraph** 規模に置き換えてみるとイメージしやすいのではないか。**paragraph** の構成観に基づけば、**oral interpretation** も本稿の論点である **persuasiveness** の問題に直結するものと考えている。⑦⑧は **Topic Sentence** をいち早く掴んだり (⑦)、**Supporting Details** の中から必要な情報を手際よく読み取る場合 (⑧) を言う。5～8の **paragraph** から成る **essay** を例に取ってみよう。各 **paragraph** の **Topic Sentence** を抜き出して繋ぎ合わせてみると、それ自体が5～8の **sentence** を要素とするひとつの **paragraph** の様相を結果として帯びる。その際、最も **assertive** な **sentence** がどれであるかを的確に掴み取る読み方がすなわち前者である。また、**paragraph** の良否は **Supporting Details** の充実度に比例するという前述の観点で言えば、図表3の(D)は頻繁に用いられる形態であって、例えば「各社案内」といったタイトルを冠した冊子などは全てこの類である。こうした客観的事実や定まった情報で構成される題材から必要な情報を速やかに探し読むことが後者である。ただし、その客観的事実や定まった情報がひとつのまとまりを持つためには、図表3の(A)から(C)の形態に還元されざるを得ない。その意味では、⑧における探し読みの対象としての情報も **persuasiveness** を有するためには **sentence** レベルに止まらず、常に **paragraph** レベルの表現構造で処理され直される必要があると言える。

読む活動における **communicativeness** の問題は、原則として書き手と読み手の間¹⁰で生起する。①から⑧のどの形態であれ、書き手が直線的な思考回路を用いて **paragraph** 単位で積み上げる様々な文献を読み解く鍵は、読み手もまた書き手同様の思考パターンに立脚して読む活動を展開することの中にあるのであって、その意味で **reading** とは全て⑨に収斂される活動と言べきであろう。読む活動は、指導者の立場であれ、学習者の立場であれ、実はこの認識が前提とならなければならない。読解は要素的な知識(例えば単語力)や技能(例えば単語から文単位までの発音)が先ではない。⑨が同時的に組み込まれていなければならない。従って、**paragraph** 論を学習の初期的段階から導入して思考パターンに順化させていくことが緊要である。読む活動の望ましい在り方としての直読直解もそうした学習過程の成果というべき側面がある点を強調しておきたい。

(2) writing

図表7¹¹は **writing** の形態を、前項(1)と同様の視点で整理したものである。①は読む活動と連動し、語句、文、更には **paragraph** の書き写しのことである。文字連結や文や **paragraph** の意味や構成を書き写しながら確認する活動である。②の書き取りは聴く活動と連動し、③への連結訓練でもあるが、①と同様の確認活動を伴う。③は読解及び聴解の

skill	activity category	activity forms
writing	communication	① copying
		② dictation
		③ Q&A
		④ note-taking
		⑤ controlled composition
		⑥ free composition
		⑦ summary-writing
		⑧ paragraph writing

図表7

確認活動としての記述問答である。④のメモ取りは①と②の発展的形態であり、読んだ内容、聴いた内容を整理して、⑤や⑦の活動に繋ぐ趣旨のものである。⑤と⑥は条件を設けた場合（前者）と条件を設けない場合（後者）とに区別される **writing** 形態であり、概ね文単位に止まる点で機能は限定的である。⑧への展開があってはじめて明確なメッセージ性を有するに至ると言ってもよい。⑦は読み聴く題材が **essay** であることを前提とする。5～8の **paragraph** から成る **essay** を一つの **paragraph** に還元する **writing** のことである。

さて、ここでも⑧の重要性が強調されねばならない。コミュニケーション活動としての **writing** の可能性を最大限に機能させる形態が⑧であるからである。①から⑦までは全て⑧に繋がっていく活動である。そこに繋がってはじめて、それぞれがコミュニケーション活動としての意味を潤沢に担うに至ると考えるべきである。言い方を換えれば、常に⑧を意識下に置きながら、他の全ての活動を構想し、諸活動の位置付けを明確にして **paragraph** 単位の **writing** を完成させることに意を用いるのである。指導者も学習者もその認識を共有していないと、所与の構造性を見失って指導や学びが曖昧に拡散しかねない。コミュニケーション活動としての **writing** は思いつくままに書き留める日記の類とは異なる。読み手に何をどう伝えるかは、英語という言葉媒体とするかぎり、いわば直線思考という線路上を、5～8輛編成の電車を一つの機関車に牽引させて走らせるようなものである。言うまでもなく、機関車は **Topic Sentence** であり、車輌は **Supporting Details** を表す。そして、その場合の推進力に相当するのが **persuasiveness** であると考えてみたい。

(3) listening

図表 8¹²は コミュニケーション活動としての **listening** を、①から⑥の形態に類別したものである。**reading** や **writing** が文字媒であるのに対して、**listening** や次項(4)で言

skill	activity category	activity forms
listening	communication	① classroom English
		② dictation
		③ gist listening
		④ scanning
		⑤ Q&A
		⑥ paragraph listening

図表 8

及する **speaking** は音声媒体で展開される。文字と音声の違いはあるにしても、**listening** は 基本的に **speaking** と **writing** が発信者サイドに立つのに対して、受信者サイドに立つ点で **reading** と重なる活動形態である。教室英語 (①) にしても、聴いて書き取り (②)、要点を聴き取り (③)、必要な情報を手際よく聴き取り (④)、聴いて問答する (⑤) にしても、これらの諸活動にはそれぞれに一定の狙いがあることは確かだが、重視すべきは、**listening** においてもやはり⑥なのである。ここでも **listening** は最終的に⑥を目指し、⑥に収斂されるという認識が必要である。指導者も学習者も、その共通の基盤に立って聴く活動を展開するとき、聴く活動に音声による情報伝達の実質的な成果、すなわち **listening** における **communicativeness** がより豊かな水準で達成されるはずである。

(4) speaking

場面にふさわしいモデル音声に近い口頭再生である図表 9¹³の①にしても、情報補完の

ための対話である②にしても、視覚的要素を伴った発表である③や場面を設定した発話である④、課題を設定した発話である⑤、口頭による自己表現である⑥にしても、複数に亘る sentence を用いるかぎり、常にそれらの文を要素とする paragraph の構成観が前提として認識されていなければならない。そうでないと その発話は結局 persuasiveness を有し得ず、従って communicativeness も欠くことになり、意思の疎通が適切に図れない仕儀を招く。経験や出来事を自らの視点で語る⑦や 問題の提起と解決にかかる議論である⑧、意見の陳述と受容である⑨についても同様のことが言える。その意味において、speaking もまた⑩に収斂する言語活動である。

skill	activity category	activity forms
speaking	communication	① shadowing
		② information gap
		③ Show-and-Tell
		④ role-play
		⑤ task
		⑥ speech
		⑦ story telling
		⑧ debate
		⑨ discussion
		⑩ paragraph speaking

図表 9

4 結び

言うまでもなく、コミュニケーション能力とは、文化や歴史を含めた豊かな教養であるとか、違いを認め合う態度とかいった品性あるいは人格の問題にも通脈する広範な意味領域を有する概念であるのだが、本稿ではコミュニケーション能力を、persuasiveness のレベルで捉えることに特化して論考してきた。もう一度繰り返すことで強調したい。発話の形態であれ、記述の形態であれ、相手の言語活動が直線的思考パターンという回路を通って迫りくるとするなら、受け手もまた、共通の思考回路を作動させて対応する必要がある。コミュニケーションが最も実質化するはこの呼応が前提となるからである。攻(話し手、書き手)守(聞き手、読み手)所を代えても事情は変わらない。あくまでも、paragraph を、persuasiveness の本質的担い手(意味単位)として駆使できることがコミュニケーション能力のコアとして位置付けられなければならない。図表 10 (○×は扱う題材の存否を表す) に示すように、コミュニケーション活動は指導の局面であれ、学習の局面であれ paragraph をいわばシナプスとして循環的に展開される必要がある。そ

stage	words	phrases	sentences	para-graphs	essays	communi-cativeness
primary	○	○	○	×	×	low
inter-mediate	○	○	○	○	×	intermedi-ate
advanced	○	○	○	○	○	advanced

図表 10

して、中学英語のしかるべき時期(例えば中2時点)で意図的に中級段階(intermediate)に突入することが望ましい。その上で、高校英語は発展段階(advanced)における諸活

動を速やかに目指すべきであって、この概念図の中で、学習者の実態を踏まえながら、指導者は、それぞれの段階における学びの実質化を図る必要がある。

なお、コミュニケーション活動を **paragraph** 単位で捉える視点は、例えば「英語が分かるとは本質的にどういうことか」、「**All in English**」とはどういうことか」といった英語指導又は学習上の基本問題について考える有効な切り口になるのではないかと思われる。その点の問題意識を、本稿結びの副産物とし、教科教育法を論考する今後の取組の俎上にあげてみたいと考えている。

-
- 1 以上は新学習指導要領「外国語活動」(小学校)及び「外国語」(中高)の「目標」による。
 - 2 コミュニケーション能力については、①文法能力、②社会言語能力、③談話能力、④方略能力の四つの側面であれば論じられるが、本稿ではそれらの四つの側面に共通する要素とは何かという問題意識に切り口を置く。
 - 3 これ以降本文中の英語表記は、キーワード化又は強調の意味合いを持たせて用いる。
 - 4 **expressive competence** (表現能力)の代用語として以下用いる。
 - 5 **persuasive competence** (説得能力)の代用語として以下用いる。
 - 6 『思考力養成の英語パラグラフライティング』(西村公正他著、1997) p.55 以下参照
 - 7 上掲書 p.39 参照
 - 8 『グローバル時代の英語教育』(岡 秀夫編著、2011) p.91 参照
 - 9 **oral interpretation** と **oral reading** はここでは前者が後者を包摂しているという関係図で捉えている。
 - 10 自室における **reading** とは異なり、教室における **reading** には常に導き手と学び手が介在する。従って、読み聴かせや範読あるいはまた音読の局面が当然潤沢に設けられることになる。その意味では **reading** における **communicativeness** の問題は書き手と読み手間においてのみ生起するわけではない。ただ、そこには段階的な活動の様態に帰せしむべき側面があるので、ここでは音声媒体を一先ず外して文字を通した出会いという第一段階に特化した形で論を進める。
 - 11 『グローバル時代の英語教育』(岡 秀夫編著、2011) p.92 参照
 - 12 上掲書 p.91 参照
 - 13 同書 p.92 参照
- その他の参考文献—
- 『パラグラフ・ライティング講座』(ケリー伊藤著、2002)
『大学生の英語ライティング---センテンスからパラグラフへ』(山村三郎他、2007)
『パラグラフ・ライティング入門』(橋内 武著、1995)
『現代の英語科教育法』(石黒昭博他、2003)
『あたらしい英語科教育法』(伊村元道他、2001)
『実践的英語科教育法』(村野井仁他、2001)
『新版英語科教育法』(木村松雄編著、2011)